

# 天草版『平家物語』の 「さればこそ—已然形」と「さてこそ—已然形」 —「こそ—已然形」採用の一要因—

徳 永 辰 通

## 1 はじめに

天草版『平家物語』(以下、天草版とする)のこそには、「こそ—已然形」となるものと「こそ—非已然形」となるものが混在している。江口正弘(1990)によると、天草版のこそ全372例のうち、約半数が「こそ—已然形」であるという。後に述べるが、天草版の「こそ—已然形」は待遇表現と話し手の身分に関わることが指摘されている。しかし、天草版のすべての「こそ—已然形」が待遇表現と話し手の身分に関わるかという点、この限りではない用例も存する。例えば「さればこそ」がそれである。

本稿ではこの「さればこそ」と、「さればこそ」の感動詞的用法と同様の表現をすることもある「さてこそ」の考察を通し、天草版への「こそ—已然形」採用の要因には、これまで指摘されてきたもの以外の要因があることを提示する。

## 2 先行研究

天草版に「こそ—已然形」が取り入れられた要因についてまとめているものに安田章(1980)がある。安田によると、「こそ—已然形」が天草版に取り入れられるかどうかには、まず地の文であるか会話文であるかが関わる。「本書」の地の文に相当する箇所「こそ—已然形」は見られず、天草版における「こそ—已然形」のほとんどが会話文に相当する箇所に見られるという(1)。そして、待遇表現と話し手の身分という二点が「こそ—已然形」であるか「こそ—非已然形」であるかに関わるという。

待遇表現については「身分的・年齢的に、従って心理的に下位の者」に対する会話文で「こそ—非已然形」となるという。この指摘は上位への待遇を意識した場合に「こそ—うずれ」が、そうではない場合に「こそ—らう」「こそ—た・よ」が見えることを指摘する宇都宮仁(1989)と符合する。話し手の身分については、「道徳的・身分的に下位の者に適したことは遣い」である場合、「こそ—已然形」が崩れるという。

安田は天草版の「こそ—已然形」の採用に以上の要因があることを指摘し、その限りではないものとして「さればこそ」を挙げている。安田は原拠本に「さればこそ—已然形」が見られないにもかかわらず、天草版に「さればこそ—已然形」が見られることに疑問を持ち、この疑問に対する答えを安田章(1992)で次のように述べている。

また、早く拘束力が弱化していたはずのサレバこそに対して、「さればこそ怪しかったれとあって」のように已然形終止を採った例が、天草本平家物語にあ

ったけれども、コソの係結の殆ど崩壊していた時期での、知識としてのコソの使用と見るべく、丁寧形サゴザレバコソは、同書で、

さござればこそそれがしは御恩を以って暫しの命ものびてござるを初め、已然形終止をもはや要求しなくなっているのである。

「コソの領域」

安田は「さればこそ—已然形」を「知識として」天草版に採用されたものとしている。この見解に基づくと、天草版の「コソ—已然形」には当時常用されていないものも含まれていることになる。それに対して安達隆一（1999）は、天草版の会話文や問答体に現れる「コソ—已然形」を「当代の口語にありふれた用法」としてしている。

本稿は安達の立場にたち、安田の挙げる採用の要因からみられる用例について改めて考察をくわえる必要があると考える。というのも、安田（1992）のように「さればこそ」の「コソ—已然形」が「知識として」採用されたとするならば、丁寧形の「さござればこそ」にも「知識として」の「コソ—已然形」が見えてよいと思われるが、「さござればこそ」には見えない。また、「さござればこそ」は「さればこそ」の丁寧形であり、待遇を意識した表現であるのに、その「さござればこそ」に「コソ—已然形」が見られない。つまり、これまで指摘されてきた天草版への「コソ—已然形」採用の要因と、天草版に「さればこそ—已然形」が採用された要因とは無縁であることが窺えるのである。これまでの指摘と無縁であるならば、これまでの指摘以外の要因の存在を考えるべきであろう。

以下、「さればこそ」が「コソ—已然形」となることと用法、表現の関係を見ていくが、「さてこそ」も合わせてみていく。というのも、「さればこそ」の感動詞的用法と「さてこそ」の感動詞的用法の表現が似ており、天草版の「さればこそ—已然形」と「さてこそ—已然形」の「さればこそ」「さてこそ」はどちらも感動詞的用法であると考えられるからである。

### 3 「さればこそ」と「さてこそ」の用法

#### 3.1 「さればこそ」の用法

「さればこそ」について『時代別国語大辞典室町時代編』（三省堂）では次のように記されている。

- 一（接）「されば」—①の順接の関係を、より強固なものとしていうのに用いる。
- 二（感）①かねて予想していたとおりの事態に当面して、あらためてその事を確認するという語
- ②応答の語として、相手のことばを一応確認するという。

「さればこそ」は大きく接続詞と感動詞とに分類される。そして感動詞は①「かね

て予想していたとおりの事態に当面して、あらためてその事を確認するという語」と②「応答の語として、相手のことばを一応確認するという」ものと細分されている。本稿では接続詞とされる用法を「接続詞的用法」と呼ぶ<sup>(2)</sup>。また、感動詞とされるもののうち、①を「感動詞的用法」と呼び<sup>(3)</sup>、②を「応答詞的用法」と呼ぶ。

### 3.2 「さてこそ」の用法

「さてこそ」は『時代別国語大辞典室町時代語編』を見ると次のようにある。

一 (接) 「さて」二②の強調形。

二 (感) 驚嘆すべき事態に改めて気付いたり、ある事に思いあたったりして、発する声。

『さて』二②は「前件を承けて、その当然の帰結としての後件を導くのに用いる。」とある。その「強調形」とされる一の「さてこそ」を「接続詞的用法」とする。

二の用法についてであるが、土井忠生訳(1992)『日本大文典』(三省堂)の「Coso (こそ), Queccu (結句), Cayette (却って)」について述べている個所の第五の記述に次のようにある。

○第五。我々がEis alli (ここにある), assi o diaia eu (私がさう言った), pois por isso (それだから), eis que (それ見よ), aum por isso (それだから)といふ時のやうな意味を持つ。例えば, Sareba coso (さればこそ), Fodoni coso (程にこそ), Sate coso (さてこそ), Soreni yotte coso (それによってこそ)。例, Sate coso vaga xūno voyuquetomo xitte attare. (さてこそわが主のお行方とも知ってあったれ。) Eis que,&c. (それ見よ, 云々)といふに同じ。「平家」(Feiq.)

『日本大文典』425-2

ここでは例文「さてこそわが主のお行方とも知ってあったれ。」が「Eis que,&c. (それ見よ, 云々)といふに同じ。」とされていることに注目したい。「さてこそ」が「それ見よ」と対応しているのである。「それ見よ」は言った通りであることを気づかせる表現であるが、この「さてこそ」は4. 1で述べるように思った通りであることに気づく表現であると考えられる。つまり、3. 1で見た「さればこそ」の感動詞的用法と似た表現なのである。本稿では、思った通りであることに気づく表現の「さてこそ」を「感動詞的用法」とする。

上記記述には他にも見逃せない点がある。それは「さてこそわが主のお行方とも知ってあったれ。」が「さてこそ—已然形」となっている点である。「さてこそわが主のお行方とも知ってあったれ。」は『平家』(Feiq.)からの引用である。つまり天草版からの引用である。この記述から、天草版に感動詞的用法の「さてこそ」が存し、かつそれは「さてこそ—已然形」であることが確認できるのである。

## 4 天草版『平家物語』の「さてこそ」

## 4. 1 天草版『平家物語』の「さてこそ—已然形」と「さてこそ」の用法

天草版に「さてこそ」は3例見られる。これらはすべて原拠本から受け継いだものである (4)。「さてこそ—已然形」は1例見られるが、この形式も原拠本から受け継いだものである (5)。

1 都であまたの乞巧人を見たれども、このやうな者をばまだ見たことがない：もし餓鬼道に尋ねて来たかと思ふほどに、かれもこれも次第に歩み近づく。もしこのやうな者もわが主のおん行方を知ることやあらうかとの申さうと言へば：何事ぞと答ゆるに：これは都から流されられた俊寛といふ人の行方を知ったかと、問ふに：童は見忘れたれども、俊寛はなぜに忘れうぞなれば、これこそそよと言ひもあへず、手に持ったものを投げ捨てて、砂の上に倒れ伏された。さてこそわが主の行方とも知ってあったれ；さなくんば、思ひも寄るまい。やがて消え入られたを膝の上にかき伏せ奉り、… 天草版86-15

1b 「都にて多くの乞巧人見しか共、かかる者をばいまだ見ず。(省略) われ餓鬼道に迷來るか」と思ふ程に、かれも是も次第にあゆみちかづく。もしか様のものも、わが主の御ゆくゑ知たる事やあらんと、「物まうさう」と言へば、「何ごと」とこたふ。「是に都より流され給し法勝寺執行御坊と申人の、御行ゑや知たる」と問に、童は見忘れたれ共、僧都は争忘るべきなれば、「是こそそよ」と言ひもあへず、手に持てる物をなげ捨て、いさごの上になふれ臥す。さてこそわが主の御行ゑはしりてんげれ。僧都やがて消え入給ふを、ひさごの上にかきのせ奉り、… 高野本163-1

有王が喜界島に流された主人の俊寛を尋ねる場面である。この用例は『日本大文典』での記述から感動詞的用法と考えるとよいであろう。

「さてこそ」とそれに後続する結び句との関係を見てみよう。有王はいまだ見たこともないような「乞巧人」に、「し」部の「もしこのやうな者もわが主のおん行方を知ることやあらうか」と思い、尋ねてみたところ、「手に持ったものを投げ捨てて、砂の上に倒れ伏す様子を見て、「さてこそわが主の行方とも知ってあったれ」と思っている。この「さてこそ」は心中文と考えられることから、予想通りであることを気づかせる表現ではなく、予想通りであることに気づく表現であろう。「し」部の「もしこのやうな者もわが主のおん行方を知ることやあらうか」は、「もしこのやうな者もわが主のおん行方を知ることやあらう」という予想の真偽を自問しているものである (6)。「さてこそわが主の行方とも知ってあったれ」は、予想通りであることに気づく表現である感動詞的用法の「さてこそ」と、それに後続する予想通りであった内容の「わが主の行方とも知ってあったれ」とが「さてこそ—已然形」で一体的に表されている。

## 4. 2 天草版『平家物語』の接続詞的用法の「さてこそ」

さて、天草版に見える「さてこそ」の残りの2例であるが、次のものである。

- 2 …、明くる二十一日の朝から大臣殿をも、右衛門の督をも引き分けて所々に置き奉れば、さてこそ親子の人すでに今日であるよと、互ひに思ひ合はれた。  
天草版363-20
- 2a 明ル廿一日ノ朝ヨリ大臣殿ヲモ右衛督ヲモ引分テ所々に並キ奉ル。サテコソ親子ノ人ノ既今日ニテ有ケルヨト互ニ思合レケリ。  
斯道本714-5
- 3 …急いで切れと仰せらるれば：六条河原で切り奉った。さてこそ湯浅は安堵したと申す。  
天草版406-24
- 3a 急キ切ルヘシト宣ハ六条河原テ遂ニ切り奉ル。サテコソ湯浅ハ安堵シケレ。  
斯道本775-7

用例2と用例3は前文の「      」部の事態が理由・原因となり、「さてこそ」に後続する「      」の事態が引き起こされており、接続詞的用法であると判断できる。そしてどちらの用例も「さてこそ—終止形」となっている。

以上のことから、天草版の「さてこそ—已然形」は感動詞的用法、「さてこそ—終止形」は接続詞的用法というように、形式と用法とが対応していることを確認できる。

## 5 天草版『平家物語』の「さればこそ」

## 5. 1 天草版『平家物語』の「さればこそ—已然形」と「さればこそ」の用法

天草版に「さればこそ」は、「さればこそ」10例、「さござればこそ」4例の合わせて14例見え、そのすべては原拠本から受け継いだものである。天草版の14例のうち、「さればこそ—已然形」となるのは次に示す用例4のみである。原拠本には「さればこそ—已然形」は見られず、この「さればこそ—已然形」は天草版独自の形式である。

- 4 ある女房大覚寺へ参って申したは：三位中将殿こそ当時は八島にござらぬと、申せば：さればこそ怪しかったれとあつて、急いで人を下されたれども、  
…  
天草版322-15
- 4a 或ル女房大覚寺へ来テ申ケルハ・三位中将殿コソ・当時ハ・屋嶋ニモ居サセ玉ヒ候ハンナレト申セハ・サレハコソ・世ハ怪シカリツル物ヲトテ・急キ人ヲ下サレタレトモ・…  
斯道本621-8

- 4b …『過候し三月十五日の暁、八島を御出候て、(省略)、那知の奥にて御身をなげさせ給ひて候』とこそ、御共申たりけるとねり武里はかたり申候つれ」と申ければ、北方、「さればこそ。あやしと思ひつる物を」とて、引かづいてぞ臥し給ふ。  
高野本(『平家物語下』) 248-4

「さればこそ怪しかつたれ」の斯道本での対応箇所を見ると「サレハコソ・世ハ怪シカリツル物ヲ」となっている。また、高野本の対応箇所を見ると「さればこそ。あやしと思ひつる物を」となっている。天草版の「さればこそ—已然形」が原拠本の「さればこそ—ものを」と対応している。

それでは、「さればこそ」に「—ものを」句が後続する場合の表現を考察してみよう。中世資料には、「さればこそ」に「—ものを」句が後続する用例が2例ある(7)。

- 5 …静如何にもして隠さばやと思へども、女の心のはかなさは、わが身憂目に逢はん事の恐ろしさに、泣く泣くありの儘にぞ語りける。さればこそ情けありける人にてありける物をとて、執行の坊に取入て、やうやうに勞り、その日は一日止めて、明けければ馬に乗せて人を付け、北白川へぞ送りける。これは衆徒の情とぞ申しける。  
『義経記』200-6
- 6 …、「こち来よ」と、呼びよせて打なでつゝ、「なにしに出家をさせけん」とて、泣かれければ、小院も、「さればこそ、いましばしと申候ひしものを」といひて、装束ぬがせて、障子の内へ具して入られにけり。『宇治拾遺物語』190-6

用例5、用例6以外で「さればこそ」に「—形式名詞+終助詞」形式の句が後続するのは、中古資料に次の2例がある。

- 7 …、権守胸打騒ぎ、「斯かる事こそ候はね。実に御正体にてわたらせ給ひけるを」とて、「是受け取り給へ」と申しければ、弁慶、「さればこそさしも言ひつる事を。笈ひ滌がざらむには、左右なく受取り給ふかな、御坊達」と云ひければ、左右なく人受取らず。  
『義経記』346-8
- 8 …、矢ノ一ヲモ不射、朝倉敦賀ヲ引ケレバ、相伴兵三百餘騎、馬物具ヲ取捨テ、越前ノ府ヘゾ逃タリケル。サレバコソ思ツル事ヨト、人毎ニ云弄プト沙汰セシカバ…  
『太平記』36-782

以上が中世資料の「さればこそ」に「—形式名詞+終助詞」形式の句が後続する用例のすべてである。用例4a、用例5を除き「—形式名詞+終助詞」句内に「申す」「言ふ」の発話動詞、「思ふ」の認識動詞が見える。用例4b、用例6には言った内容、思った内容が「—形式名詞+終助詞」句内の引用部に見える。用例7、用例8は言った内容、

思った内容は示されていない。発話動詞、認識動詞が見える用例4b、用例6、用例7、用例8の「さればこそ—形式名詞+終助詞」は予想通りであることに気づく表現であると判断できる。

次に発話動詞、認識動詞が現れない用例が問題となる。用例4aを見てみよう。用例4aは、用例4bの「さればこそ。あやしと思ひつる物を」の認識動詞が明示されずに、思った内容に「ものを」が直接しているものと判断できる。そのため、用例4aも予想通りであることに気づく表現であると考えられる。このように見てみると、残された用例5においても発話動詞、認識動詞が明示されずに、思った内容に「ものを」が直接しているものと考えられそうである。

以上、中世資料に見える「さればこそ—形式名詞+終助詞」形式は予想通りであることに気づく表現であると考えられる。原拠本の予想通りであることに気づく表現の用例4aに対応していることから、天草版の用例4も予想通りであることに気づく表現であると考えられる。

それでは用例4の「さればこそ怪しかったれ」の「さればこそ」の用法は接続詞的用法であろうか、それとも感動詞的用法であろうか。「さればこそ」に後続する「怪しかったれ」は、思った通りだった内容であった。4. 1で見たが、「さてこそ—已然形」の「さてこそ」に後続する「—已然形」句も思った通りだった内容であった。そうすると、「さればこそ怪しかったれ」も「さてこそわが主の行方とも知ってあったれ」と同様に、予想通りであることに気づく表現である感動詞的用法の「さればこそ」に思った通りだった内容が後続しているものと考えられるのではないだろうか。感動詞的用法の「さればこそ」と、それに後続する予想通りであった内容の「怪しかったれ」とが「さればこそ—已然形」で一体的に表されていると考えられる。

## 5. 2 天草版『平家物語』に見える「さればこそ」

5. 1において天草版の「さればこそ—已然形」は「さてこそ—已然形」と同様に、予想通りである感動の表出と、予想通りだった内容とを一体的に表していると考えられた。そして「さてこそ—已然形」は感動詞的用法、「さてこそ—終止形」は接続詞的用法というように、用法と形式の対応が認められた。「さればこそ」にも「さてこそ」と同様に用法と形式の対応が見られるのであろうか。

天草版には14例の「さればこそ」が見える。これらのうち「さればこそ」に引用の「と」が直接するものは3例見える。また「さればこそ」に「:」が付され、後続する文と切れていると考えられるものが1例見える。これら4例は後続する文がないため、「こそ—已然形」との対応を考察することができない。本節では、これら4例を除いた「さればこそ」を考察対象とし、「さればこそ」の用法と「こそ—已然形」との対応について考察していく。

### 5. 2. 1 「さござればこそ」

天草版に「さればこそ」の丁寧形「さござればこそ」は4例見えるが、「さござれば

こそ一已然形」となる用例はない。これら4例は原拠本において「さ候へばこそ」となっており、原拠本においても「さ候へばこそ一已然形」である用例はない。

- 9 少将は待ち受け奉って、さて何とござるぞと、申されたれば：清盛あまりに腹を立てて、宰相には終に对面もせられず、かなふまじいと、しきりに申されたれども、出家入道まで申したれば、それゆゑにかしばらく、宿所に置き奉れと、言はれたれども、始終しかるべからうとも見えぬ。少将さござればこそそれがしは御恩をもってしばしの命も延びてござる：…  
天草版40-20

- 9b 少将まちうけ奉て、「さていかゞ候つる」と申されければ、「入道あまりに腹を立てて、教盛には終に对面もし給はず。かなふまじき由頼にの給ひつれ共、出家入道まで申たればにやらん、しばらく宿所にをき奉れとの給ひつれ共、始終よかるべしとおぼえず。」少将、「さ候へばこそ、成経は御恩をもって、しばしの命ものび候はんずるにこそ。…」  
高野本92-8

用例9の「さござればこそ」に後続する「それがしは御恩をもってしばしの命も延びてござる」は、宰相の「清盛あまりに腹を立てて、～」の「      」部の内容を前件とする後件にあたると考えられる。ゆゑに用例9の「さござればこそ」は接続詞的用法と考えられよう。

- 10 樋口を召せと言うて、呼ばれたれば、樋口は参つて実盛が首をただ一目見て、やがて涙に咽ぶをいかにいかにと尋ねらるれば、あら無慚や、実盛でこそござれと申すに：鬚の黒いは何ごとぞと問はれたれば：樋口涙を押し拭うて申したは：さござあればこそそのやうを申さうとすれば、不覚の涙が先立って申しえまらせぬ。  
天草版171-21

- 10a 樋口召セトテ・召レケリ・樋口次郎・マイリ・真盛カ首ヲ・只一回見テ・ヤカテ・涙ニソ咽ケル・イカニイカニト宣ハ・アナ無暫ヤ・真盛ニテ候ケリト申ス・鬚ノ黒ハイカニト宣ハ・樋口次郎涙ヲ推シ拭テ・申ケルハ・サ候ヘハコソ・其ノ様ヲ申ントスレハ・不覚ノ涙カ・先・立ツテ・申シ得ス候・  
斯道本435-6

- 11 文覚六波羅へ行つてこの由を尋ねられたれば、北条さござればこそ平家は一門広かつたれば、子孫多からうず：  
天草版387-8

- 11a 北条・サ候ヘハコソ・平家ハ・一門廣カリシカハ・子孫多カラン・  
斯道本753-5



用例10、用例11は、「」部の「問はれた」「尋ねられた」とあることから判断すると、質問に対しての応答詞の用法であると解せよう。

12 さて文覚も来たられ、六代御前乞ひ受け申したとて、気色まことにゆゆしげで父三位の中將殿は数度の軍の大將なれば、いかに申すともかなふまじいと頼朝仰せられたを聖が奉公のよしみをさまざまに申しとどのゆるほどに、遅かったぞと言はるれば：北条さござればこそ二十日と仰せられた日数も既に延びまするに、思へば、賢うこそ今まで通しまししたれとて、… 天草版392-12

12a サテ文覚来ラレタリ・六代御前乞請タリトテ・氣色真ニユユシゲ也・父三位中將殿ハ・数度ノ軍ノ大將ナレハ・イカニ申トモ叶マシキ・鎌倉殿ノ宣シヲ・聖カ奉公ノ好ヲ・様々申調ホトニ遅カリツルヨトソ宣ケル・北条サ候ヘハコソ・廿日ト宣フ・日数モ既ニ延候ニ・思ヘハ賢フコソ・今及通シマイラセテ候ヘトテ・… 斯道本758-10

用例12は「父三位の中將殿は～」以下の「」部の内容と「二十日と仰せられた日数も既に延びまするに、思へば、賢うこそ今まで通しまししたれ」とが前件と後件の関係にあるとも考えられるし、文覚の「」部の発話を受けて北条が「二十日と仰せられた日数も既に延びまするに、…」と続けているとも考えられる。また、「」部の内容が言った通り、または思った通りの内容であったことから「さござればこそ」が発せられたとすると感動詞的用法とも考えられる。この箇所は高野本で次のようになっている。

12b さる程に文覚房もつと出きたり。若公こひうけたりとて、きそく誠にゆゝしげなり。「此若公の父三位中將殿は、初度の戦の大將也。誰申とも叶まじ」とのたまひつれば、「文覚が心をやぶつては、争か冥加もおはすべき」など悪口申つれ共、猶、「叶まじ」とて、那須野の狩に下り給ひし間、刺文覚も狩場の供して、やうやうに申てこひ請たり。いかに遅ふおほしつらんと申されければ、北条、「廿日と仰られ候し、御約束の日かずも過候ぬ。…」

高野本（『平家物語下』）369-7

高野本には天草版の「さござればこそ」、斯道本の「サ候ヘハコソ」に該当するものが見あたらないのであるが、「」部の文覚の発話が「いかに遅ふおほしつらん」と質問形式となっている。天草版、斯道本には「いかに遅ふおほしつらん」という質問形式は現れないのだが、高野本を考慮すると用例12は文覚の発話を受けて、北条が「二十日と仰せられた日数も既に延びまするに、…」と続けていると考えられそうで、応答詞的用法と言えるのではないだろうか。

以上が天草版に見える「さござればこそ」のすべてである。天草版において「コソ

「一已然形」が待遇表現と関わるという指摘があるが、待遇を意識した丁寧形「さござればこそ」には「さござればこそ—已然形」が見えず、「さればこそ」はその指摘の限りではないことが確認できる。

### 5. 2. 2 その他の「さればこそ」

これまでの考察の対象にもれた天草版の用例を取り上げる。

13 資成急いで御所へ馳せ参ってこの由を奏聞せられたれば、法皇は早これらが内々謀んだことが漏れたよと思し召されて驚かせられ、これは何事ぞとばかり仰せられて、分明におん返事もなかつた。資成急いで馳せ帰って清盛にこの由を申したれば、さればこそ行綱はまことを言うた；このことを行綱が知らせずは、清盛安穩にあらうかと言うて、… 天草版23-15

13b 資成急ぎ御所へはせ参り、大膳の大夫信成呼び出いて、此由申に色をうしなふ。御前へ参って此由奏聞しければ、法皇、「あは、これらが内々はかりし事の洩れにけるよ」とおぼしめすにあさまし。「さるにても、こは何事ぞ」とばかり仰られて、分明の御返事もなかりけり。資成急ぎ馳帰って、入道相国に此由申せば、「さればこそ、行綱はまことを言ひけり。この事行綱しらせずは、常海安穩にあるべしや」とて、… 高野本77-7

用例13の「さればこそ」は、資成に聞いた「」部にある法皇の様子を理由とし、「行綱はまことを言うた」という帰結が導かれたとすると接続詞的用法である。また、資成に聞いた法皇の様子から予想通りであることに気づいたとすると感動詞的用法であるともとれる。感動詞的用法であるとする、「行綱はまことを言うた」は予想通りであった内容、または予想通りであったことから得られた帰結ということになるが、区別はつかない。

14 少将このことを心得て、近習の女房たちを呼び出いて、(省略)成親卿は夜さり切られうとの沙汰ぢや：それがし少将も同罪でござろうと、存ずる。今一度御前へ参って君をも見奉りたうは存ずれども、既にかかる身に罷り成ってござれば、憚り存ずると申されたところで、女房たち御前へ参って、この由を奏せられたれば：法皇大きに驚かせられて、さればこそ今朝清盛が使ひはこのことであつたよ：まづこれへと御気色あつたによって、… 天草版36-6

14b 少将此事心得て、近習の女房達呼び出し奉り、「(省略)大納言よさりきるべう候なれば、成経も同罪にてこそ候はんずらめ。今一度御前へ参って、君をも見まいらせう候へ共、既にかゝる身に罷りなつて候へば、憚り候」とぞ申されける。女房達御前へ参って此由奏せられければ、法皇大きにおどろかせ給ひ

て、「さればこそ。けさの入道相国が使いに、はや御心得あり。あは、これら  
が内々ばかりし事の洩れにけるよとおぼしめすにあさまし。 高野本88-13

用例14であるが、女房が奏した「この由」を理由として「今朝清盛が使ひはこのこと  
であったよ」という帰結が導かれたとすると接続詞的用法である。新日本古典文学  
大系『平家物語上』では、「やはりそうだったか。」と注が付されており、感動詞的用法  
としている。これに従うと、「さればこそ」に後続する「今朝清盛が使ひはこのこと  
であったよ」という判断は、用例13と同様に予想通りであった内容、または予想通り  
であったことから得られた帰結ということになるが、この用例においても区別はつ  
かない。

15 普天の下王土にあらずといふことはござない：さればこそ唐土に、かの潁川の  
水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折って露の命を継いだる賢人も勅命背きがたき礼  
儀をば存じたとこそ承ってござれ：いかに況や、… 天草版45-22

15b 「…普天のした、王地にあらずと云事なし。されば彼潁川の水に耳を洗ひ、首  
陽山に蕨をおッし賢人も、勅命そむきがたき礼儀をば存知すとこそ承はれ。何  
況哉、…」 高野本97-3

用例15の「さればこそ」は原拠本を見ると「されば」となっている。また、前文の  
「普天の下～」も「さればこそ」に後続する「唐土に、かの潁川の～」も重盛の会話  
文である。これらのことから、用例15の「さればこそ」は接続詞的用法であると判断  
できる。

16 六波羅から頼盛を使ひにして、この御所に高倉の宮の若君、姫君たちのござる  
と聞いた。姫君をば申すに及ばぬ、若君をば出しまゐらせられいと、申された  
れば：(省略)女院のお返事には、さればこそこのことの聞こえた暁お乳母な  
どが心幼うて具し奉って出たか、この御所にはござらぬと、仰せられたれば、  
… 天草版137-18

16a 六波羅ヨリ・太政入道・池中納言頼盛ヲ以テ・此ノ御所ニ・高倉宮ノ若君・姫  
君・ワタラセ玉フナル・姫君ヲハ・申ニ及ハス・若君ヲハ・出シ進サセ玉ヘト  
・申セハ・(省略)・女院ノ御返事ニハ・サレハコソ・カ、ル聞アリシ暁・御  
乳母ナント・心稚モ・具シ奉テ出ニケルヤラン・此御所ニハワタラセ玉ハス  
ト・御返事アリケレハ・… 斯道本290-6

用例16は「若君をば出しまゐらせられい」という頼盛の注文に対する「女院のお返  
事」であることから、「さればこそ」は応答詞的用法であると考えられる。

- 17 さうするほどに武者が後ろに続いた：誰そと問へば、平山と言ふ。平山殿か？  
熊谷ぢゃ：なう熊谷殿か？いつからぞと問へば、熊谷は宵からと答へた：その  
時平山うち寄せて申したは：さればこそそれがしも疾う寄せうずるを成田に賺  
されて、今まで遅々した： 天草版263-6

- 17a サルホトニ・武者コソ後ロニ續ヒタレ・誰ト問ヘハ・季重ト名乗ル・平山殿カ  
・直実是ニアリ・如何ニ熊谷殿カ・イツヨリザウト問ヘハ・直実ハ・宵ヨリト  
ソ・答ヘケル・其時平山・打ヨセテ申ケルハ・サレハコソ・季重モ・疾寄スヘ  
カリツルカ・成田五郎ニ賺レテ・今マテ遅々メサウソ・ 斯道本524-7

- 17b さる程に、又うしろに武者こそ一騎つゞひたれ。「たそ」ととへば、「季重」と  
こたふ。「とふは、たそ」。「直実ぞかし」。「いかに熊谷殿はいつよりぞ」。「直  
実は宵より」とぞこたへける。「季重もやがてつゞひてよすべかりつるを、成  
田五郎にたばかられて、いままで遅々したる也。…」

高野本（『平家物語』下）155-14

用例17、用例17bの「さればこそ」は高野本には見えない。高野本では熊谷と平山  
とが互いに質問をし、互いに質問に答えている。このような質問と返答が繰り返されて  
いる場面であることを考慮すると、用例17は応答詞的用法であると考えられる。

### 5. 3 天草版『平家物語』の「さればこそ—已然形」

用例13と用例14は感動詞的用法である可能性があった。もし用例13、用例14が接続  
詞的用法であるとする、「さればこそ」の接続詞的用法は「さればこそ—非已然形」、  
感動詞的用法は「さればこそ—已然形」というように、用法と形式とが対応する。そ  
うすると、「さてこそ」と同様に「さればこそ」も用法と形式とが対応することにな  
る。用例13と用例14の判別は不可能であるため、これ以上の議論は避けるが、いずれ  
にせよ、天草版独自の形式である用例4の「さればこそ—已然形」は、予想通りであ  
ることの感動の表出と、予想通りであった内容とを一体的に表す型であると考えられ  
る。

## 6. まとめ

「さてこそ—已然形」は、予想通りであることに気づく表現と、予想通りであった  
内容とを一体的に表す型であることを明らかにした。「さてこそ」の感動詞的用法と  
「さればこそ」の感動詞的用法は同様の表現であると考えられることから、用例4の  
「さればこそ怪しかったれ」も「さてこそ—已然形」と同様に、予想通りであること  
に気づく表現の感動詞的用法の「さればこそ」と、予想通りであった内容の「怪し  
かったれ」とが「さればこそ—已然形」で一体的に表されているものと考えられる。

「さてこそ—已然形」「さればこそ—已然形」の表現についてであるが、用例1も用例4もどちらも結び句は予想した内容に過去の助動詞「た」がついている。結び句は予想した内容が予想通りだったということを確認しているものと考えられよう。「さてこそ—已然形」「さればこそ—已然形」の「さてこそ」「さればこそ」で予想通りだったことに対する感動を表出し、予想した内容が予想通りだったということを確認している表現であると考えられる。そして天草版成立当時、「さてこそ—已然形」も「さればこそ—已然形」もこのような表現をするための形式と化していたと考えられる。

「さてこそ—已然形」と「さてこそ—終止形」の「さてこそ」は、それぞれ感動詞的用法と接続詞的用法というように形式と用法とが対応していた。用例3aでわかるように、原拠本ではこのような対応関係にはない。原拠本の用例3aにおいて「さてこそ—已然形」であったものが、天草版の用例3では「さてこそ—終止形」となっている。これは天草版成立当時に「さてこそ—已然形」が先に示した表現をするための形式と化していたため、混同を避けて「さてこそ—終止形」として天草版に採用されたのではないだろうか。そして「さればこそ—已然形」も先に示した表現をする形式であったため、天草版に取り入れられたと考えられる。天草版への「こそ—已然形」の採用には待遇表現や話し手の身分の関わり他に、天草版成立当時特定の表現を担う形式と化していたことも関わっているのである。

## 【注】

- (1) 江口(1990)にも同様の指摘がある。
- (2) 『『されば』一①』には「順接の確定条件を示す」とある。
- (3) 徳永辰通(2007)では「伝えた通りであることを気づかせる」表現の「省略型」と「思った通りであることに気づく」表現の「感動用法」とを区別した。この区別は、「さればこそ」が「感動用法」を獲得していく過程を述べるのに必要であった。しかし、「省略型」と「感動用法」の区別は困難である。そのため、本稿では「省略型」と「感動用法」とを合わせて「感動詞的用法」と呼ぶ。
- (4) 近藤政美(1999)に倣い高野本巻第一～巻第三、斯道本巻第四～巻第七、巻第九～巻第十二を「原拠本」とする。欠本である巻第八に国会図書館本を用いた研究もあるが、本稿は用いない。なお、本稿で扱ったテキストは次の通りである。  
天草版『平家物語』：近藤政美・池村奈代美・濱地代いづみ共編(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』勉誠出版//高野本：新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店//斯道本：斯道文庫編『百二十句本平家物語』汲古書院
- (5) 引用は文意を明らかにするため表記を改めたところもある。また、一部省略したところもある。用例番号の「a」は斯道本、「b」は高野本であることを示す。一部高野本で『平家物語下』からの引用もある。その場合は『平家物語下』からの引用であることをその都度示す。
- (6) 益岡隆志・田窪行則共著(1992)に従うと、「もしこのやうな者もわが主のおん

行方を知ることやあらうか」は真偽疑問文の自問型と解せよう。

(7) 中世資料は次の通りである。

日本古典文学大系・岩波書店…『平治物語』『保元物語』『宇治拾遺物語』『徒然草』『義経記』『御伽草子』// 新日本古典文学大系・岩波書店…『平家物語』// 山内洋一郎編 (1969)『古本説話集総索引』風間書房// 西端幸雄・志甫由紀恵共編 (1997)『土井本太平記本文及び語彙索引』勉誠社

#### 【参考文献】

- 安達隆一 (1999) 「不干ハビアンと『天草版平家物語』:『コソ』の行方」『ことばと文学と書』双文社出版
- 宇都宮仁 (1989) 「天草版平家物語における係り結び『こそ』の用法について」『国文学駒沢』第26号
- 江口正弘 (1990) 「天草版平家物語の『こそ』について—係り結び崩壊の視点から—」『国語学攷』128号 (広島大学国語国文学会)
- 近藤政美 (1999) 「天草版『平家物語』の翻字に関する諸問題」『天草版平家物語語彙用例総索引 (1)』勉誠出版
- 土井忠生訳 (1992) 『日本大文典』三省堂 (原著者 J. ロドリゲス)
- 徳永辰通 (2007) 「『さればこそ』の二種の用法—主体の感動を表出する用法の成立—」『ことばの論文集—安達隆一先生古稀記念論文集—』おうふう
- 益岡隆志・田窪行則共著 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 安田章 (1980) 「コソの拘束力」『国語国文』第49巻第1号
- 安田章 (1992) 「コソの領域」『国語国文』第61巻第1号

(中部大学国際人間学研究科言語文化専攻)